

# 「コトづくり」と「ものづくり」の再定義

蘆澤 雄亮<sup>\*1</sup>・櫻木 新<sup>\*1</sup>

## Redefinition of Koto-tsukuri and Mono-tsukuri

Yusuke ASHIZAWA<sup>\*1</sup> and Shin SAKURAGI<sup>\*1</sup>

**Abstract**—The phrase “Koto-tsukuri”, which is known to be a unique, original expression in Japanese, is supposedly one of the most important keywords in terms of TRAFST’s focus. Nonetheless, the phrase shows considerable ambiguity, and thus, TRAFST is in need of an unequivocal definition of the phrase. In this paper, we inquire how to redefine the phrase by illuminating the conceptual difference between “Mono” and “Koto” in ordinary use. We conclude that the contrast between “Mono” in “Mono-tsukuri” and “Koto” in “Koto-tsukuri” should be characterized in light of the relation between means and event or phenomena it brings about.

**Keywords**— Koto, Mono, Redefinition, Koto-tsukuri, Mono-tsukuri

### 1. はじめに

横断型基幹科学技術研究団体連合（以下「横幹連合」）では、設立当初よりコトづくりの重要性を訴え、その一環としてコトづくりの見える化を目的に「コトづくり至宝事業（以下「至宝事業」）」を2018年度より開始した。

一方、「コトづくり」という表現の指し示す概念的な曖昧さは従前より問題視されており、これらの表現について概念的な再定義の必要性が指摘されている [1]。この問題の核心は、対比的に用いられる「ものづくり」における「もの」と、「コト」に概念的区別の曖昧さが存する点にある。そこで本研究では「コト」および「もの」が表現する概念を主として、日常的な用法の検討から分析し、「コトづくり」の再定義を目指す。なお、コトづくりに限らず「～づくり」とされるものについて「～づくり」と表記される事例も散見されるが、本論においては両者を同義のものとみなした上で「～づくり」と表記する。

### 2. コトづくりの定義にまつわる問題点

#### 2.1 ものづくりとの対比としてのコトづくり

鈴木 [1] によれば「コトづくり」という表現は1980年代に使われ始め、2000年代後半より一般的に使われる

ようになったとされる。特に2000年代中盤以降の使用事例（田中 [2]、常盤 [3]、藤堂 [4]）、およびコトづくり長野宣言（以下「長野宣言」） [5] に確認できるように、この表現は「ものづくり」という表現に対比されて使用されている。その背景には、従前より広く使われている「ものづくり」という表現では上手く捉えることのできない事象があるという理解が存在する。そして「もの」と対比される「コト」という表現を用いることで、これらの事象を表現するという意図があったと考えられる。このような傾向は先に挙げた事例だけではなく、一般的に確認できる傾向であると言えよう。

#### 2.2 コトづくりともものづくりの意味

「コトづくり」が「ものづくり」の対比表現として登場したことについてあまり疑いの余地はないが、両者の意味に厳密な違いが確認されるとは言い難い。

例えば「ものづくり基盤技術進行基本法（以下「ものづくり法」）」では「ものづくり」を、「製造業」を意味する表現として用いており [6]、日本学術会議ではソフトウェアの発想・設計などを含む「人工物を発想・設計・製造・使用・廃棄・回収・再利用する一連のプロセスおよびその組織的活動すべて」と定義している [7]。一方、長野宣言においてコトづくりの定義は「ものの形だけではなくその『機能』およびその機能を『創造するプロセス』を重視し体系化していくこと」と定義している。

この両者の定義を比較すると、両者共に「創造するプロセス」に着目している点において同様であり、一方で特徴的な差分を見出そうとした場合、「体系化」という

<sup>\*1</sup> 芝浦工業大学デザイン工学部 東京都港区芝浦 3-9-14

<sup>\*1</sup> Shibaura Institute of Technology, College of Engineering and Design, 3-9-14 Shibaura, Minato-ku, Tokyo

Received: 4 April 2019, Revised: 3 June 2019, Accepted: 14 June 2019.

一点のみに絞られる。しかしながら、ものづくりにおける「組織的活動すべて」に体系化という行為も含めた場合、その差分は不明確となる。時系列を鑑みればコトに着目する機運の高まりを踏まえ、ものづくりの定義も拡大化されたと考えるのが自然であるが、一般的意味合いにおいて趣を異にするであろう「もの」と「コト」において、「つくり」を付与した場合に差分が消滅することはあまり望ましい状況ではない。特に、コトづくりがものづくりの対比表現として登場した件を鑑みると、適切な状況であるとは言い難い。

すなわち、再度、両者の意味関係を見直し、各々の位置づけを明確にする必要があるのではないだろうか。

### 2.3 コトづくりの再定義における課題と方法

すでに明らかなように「ものづくり」と「コトづくり」は一種の専門用語として使用されており、これらの表現そのものを日常会話などの用法から検討するのは現実的ではない。またこれらの表現が現れる専門文献において、その定義的な説明が明らかに示しているように、両者の差分が明確に示唆されていることを期待すべきではないだろう。むしろ「ものづくり」「コトづくり」の語源の一部である「もの」と「コト」という二つの語の意味の比較にこそ、「コトづくり」の再定義の方策としてより正当であるように思われる。そこで本研究では、日常的な表現としての「もの」および「コト」の差異を出発点に、新しい角度から「ものづくり」と「コトづくり」の両者の再定義を目指す。

以上より、本稿の主要課題は「つくり」を外した「コト」と「もの」の概念的差異の明確化となる。そして、そのような分析を踏まえ、「コトづくり」および「ものづくり」の概念的な再検討、および各々の位置づけの明確化を行う。

なお、「コトづくり」における「コト」は「もの」に対する強調の意図からカタカナ表記が用いられているが[8]、この表現が日常的な意味での「こと」と明確な差異を有すると考える特段の理由はない。そこで本稿では、表現上の混乱を避けるために以下より、検討対象としての「こと」および「もの」を指す場合は片仮名の「コト」「モノ」を用いることとする。

## 3. モノとコトの差異

### 3.1 モノとコトの文法的な位置づけ

「モノ」と「コト」には一般に形式名詞と呼ばれる用法が知られており、「コト、モノ、トコロ、ワケ、サマ等」の一群の名詞(寺村[9])は普通名詞と区別して考えるべき文法上の機能的な別の役割が指摘されている。普通名詞は通常「実質的意義によって文の実質的内容を埋め

る」(ibid.)ことを主たる役割とするが、これらの形式名詞と呼ばれる名詞は実質的意義よりも「実質的意義を担う部分をつなぎ合わせたり文末の陳述を完成させたりする機能」を主に担い、「形式的には連体修飾の被修飾語として立ちながら形式用言ダの類と結びついて文末の述語文節を形作る」(ibid.)機能語としての役割を主に担う。

寺村も批判するように廣松[10]などの哲学的考察の多くは、日本語の実際の用法を無視し thing と proposition のような、哲学において第一言語と見なされるような欧米諸語との類比において「モノ」と「コト」の差異を論じる傾向が強い。結果として、長谷川[11]における考察のように普通名詞と形式名詞を区分けしない分析が散見される。しかし本稿の出発点はあくまでこれらの語の日常的な意味であり用法であるため、寺村の指摘に従って、「モノ」と「コト」を安易に thing と proposition の用法に置き換えることは避け、一般に流通する日本語の用法の詳細な確認に分析の焦点を当てることとする。

そこで本研究では「モノ」「コト」がそれぞれ普通名詞と形式名詞の二つの異なる用法を持つことを前提とし、それぞれに概念的差異を考察する。他方において、寺村(ibid. p.76)が「これらの語が名詞としての本来の構文的機能を果たしているときのその『実質的な』意義がどのようなものであるのかを考えるとところから出発し、そのような本来の意義が(中略)それぞれどのように関わっているかという方向に観察を進めなければならない」と指摘するのと同様に、形式名詞の用法にどのように関わっているかを考察するべきであろう。

なお、本研究では「モノづくり」または「コトづくり」に接続するモノとコトを対象とするため、その研究対象は「物」と「事」に限定する。

### 3.2 普通名詞としてのモノとコト

直観的にも明らかであるように思われる出発点は、普通名詞としての「モノ」「コト」はそれぞれ、前者は物体的な存在を、後者は出来事や事態を指示するという指示対象の差異である。この違いに限定すれば、「モノ」と「コト」の概念的な差異は、存在論的なカテゴリーの違いに収斂することになる。

しかし、長谷川も示唆している(ibid. pp.157-158)のように、「モノ」と「コト」の両語は単に指示対象のカテゴリーの違いだけでは説明の難しい用法上の興味深い差異を示す。すなわち両者とも、より具体的な事例に置き換えても文の大意が変化しないという点である。後記 **Table 1** はデジタル大辞泉[12]による「モノ」(「物」)と「コト」(「事」)の意味区分と用例であるが、これを見ると、モノは「モノ(物体)を持つ」「モノ(品質)がよい」「白いモノ(衣服)を着る」「モノ(食物)が喉を通らない」「モノ(言葉)も言えない」「モノ(文章)を書く」

**Table 1:** Usage examples of Mono and Koto as a common noun

モノ			
No	意味区分	詳細等	例文
1	空間のある部分を占め、人間の感覚でとらえることのできる形をもつ対象.	物体、物品・商品、品質、着物、衣服、食物、有体物.	モノを持つ。モノがよい。白いモノを着る。モノが喉を通らない。
2	人間が考えることのできる形のない対象.	何かの事柄・物事、ことば、文章、作品、学問、物事の筋道、道理、理屈.	モノの役に立つ。モノも言えない。モノを書く。モノの道理。モノの順序。
3	妖怪・怨霊など、不可思議な霊力をもつ存在.	—	モノに取り憑かれる。
4	所有している物品・事物、所有物.	—	会社のモノを借用する。この企画は彼のモノだ。
コト			
No	意味区分	詳細等	例文
1	夜中に起こる、自然または人事の現象、事柄、出来事.	—	コトの真相。コトの起こり。
2	大変な事態、重大な出来事.	—	失敗したらコトだ。これはコトだぞ。
3	仕事、用件.	—	コトを成す。
4	物事の状態や経過。また、それを中心とした事情、いきさつ.	—	コトを見守る。コトと次第によっては許さない。

「モノ（筋道）の順序」「モノ（怨霊）に取り憑かれる」「会社のモノ（所有物）を借用する」「この企画は彼のモノ（所有）だ」といった仕方では、丸括弧内のより具体的な表現に置き換えたとしても文の大意は保存される。同様に「コト」は「コト（事柄）の真相」「コト（出来事）の起こり」「失敗したらコト（大変な事態）だ」「これはコト（重大な出来事）だぞ」「コト（仕事）を成す」「コト（経過）を見守る」「コト（いきさつ）と次第によっては許さない」といった置換が可能である。

これら置換可能な名詞群をそれぞれ比較すると、普通名詞としての「モノ」「コト」の用法上の差異が浮上する。「モノ」は物体、品質、衣服など具体的な個物を指示することなく、一定の性質を指し示す一般名詞で代用される。他方、コトについては一定期間において生じた（生じる）現象・出来事を指し示す表現によって置換されるが、事柄、出来事、事態など、それ自体「コト」の漢字表記である「事」を一部に含む言い換えが多く、「モノ」と比較すると言い換えによって明確な意味上の共通点を「コト」の概念に依存することなく明示することが

困難だという特徴を持つ。

この概念的不明瞭さはむしろ「コト」という表現の用法が示す一定の特徴に由来する。「モノ」が、概念的に具体的内容を示す一般名詞に置き換えることが可能なのは、それらの用法が「モノ」を指示する対象の持つ一定の性質に着目しているからである。他方、「コト」には現象・出来事の一般的性質に着目するという指向性は見られず、むしろ「コト（Aさんが会社を辞めたという出来事）の真相」や「コト（Bという出来事の成り行き）を見守る」といった、出来事自体の存在に着目する用法が目立つ。

このことから、普通名詞としての「モノ」と「コト」の用法上の差異は、概念よりもむしろ「用法の持っている志向性の違い」に見出すことが自然であろう。すなわち、「モノ」が「指示される対象の持つ一定の性質や特徴への注目」を意図しているのに対し、「コト」は「指示される対象そのものへの着目を促す」意図をもって使用されているのである。長谷川はこれらの用法上の差異を「対照的な＜意味のベクトル＞」の違いとし、『もの』がすべてをぼやかし、後方へ、下方へと沈み込んでゆくのにに対し、『こと』はくっきりとした輪郭を描いて屹立する」と比喩的に表現している。しかし、これをより正確に表現するのであれば、普通名詞「モノ」と「コト」の差異は、これらの語を使用する背景にある「意図」に起因すると考えるべきであろう。「モノ」「コト」はそれぞれ一般的なカテゴリーの存在者を指示するためと言うより、むしろ「モノ」は一定の性質や特徴への注目を、「コト」は対象そのものへの着目を促す意図で使用されるのである。

これらの典型的な用法から外れるいくつかのケースについて考察しておく。一つは「モノを考える」という表現である。例えば「彼はモノを考えることが出来ない」といった表現は、一見すると一切の性質に依存しない不特定の対象に言及している様にも見える。しかしこの文を過去形にした時、「彼はモノを考えることが出来なかった」という不自然な文章になる。「彼は何も考えることが出来なかった」という文章の方が自然であることを考えれば、彼はモノを考えることが出来ない」における「モノ」と、完全に不特定の「何か」との間には、一定の差異が存在するように思われる。実際、「彼はモノを考えることが出来ない」と「彼は何も考えることが出来ない」を比べると、前者には「当然もつべき思考能力」の欠如を非難する意図を理解できるだろう。だとすれば、後者が不特定の「何か」について言及しているのに対し、前者はむしろ「想定されたその場面において、まともな人であれば通常考えることが出来る一連の内容」に言及していると解釈するのが自然である。したがって、この用法も「ある一般的な性質に着目する」という「モノ」の

用法の一例であると理解できる。

「モノの役に立つ」も同様に、不特定の対象に言及している様に見える。ここでの「モノ」は、おそらく「何か」という表現によって置換可能であろうが、しかし明らかに「モノの役に立つ」と「何かの役に立つ」には意味上の違いが存在するように思われる。つまり「モノの役に立つ」という表現は「不特定の何か」ではなく、あくまで（ここでは特定されないが、後に特定し得るという意図を持った）「具体的な何か」の役に立つという意味で用いられることが推測される。例えば、「モノの役に立つ」を「何か」で置換するのであれば、「他のすべての学問は哲学よりも“もの（それぞれの用途に応じた何か）の役に立つ”かもしれないが、哲学よりすぐれてはいない [13]」のように言い換えることができる。

ここでの「何か」とは、単に「何かの役に立つ」という「何か」で意図される不特定の「何か」とは異なり、（現時点では未定であるが、学問を指定された場合、特定し得る）「何か」の意味である。つまり、前提となる学問が指定され、「条件が整った段階」でその内容が特定される。また、学問が指定された場合、「当該学問の一般的性質」と「哲学の一般的性質」を比較し、その内容が特定される。すなわち、両者ともに一般的性質の比較であり、この時点において特定される「何か」もその差分であるため、この用法も先の「モノを考える」と同様の方針で分析できる。ただし、他の用法が「既に明らかになっている一般的な性質」を問題としているのに対し、当該用法は「未来において明らかになる性質」を問題としている点に大きな違いがあると言えるかもしれない。

「コト」の例外的な用法に目を向けると、「失敗したらコトだ」「これはコトだぞ」など、「一大事」や「問題」のような「ある一定の性質」を示唆する表現に置き換えられる文があげられる。これらの用法の鍵は変化である。前者は例えば「失敗したら（現在の状態が）一大事になる」、後者は「これは一大事になった」と言い換えられるように、いずれの文も「コト」すなわち「一大事」「問題」が生起する／していることが意味されている。そこで意図されているのは、「一大事」や「問題」のもつ性質への言及ではなく、事柄が一大事または問題へと“変化”する／したことへの着目である。すなわち、（ここでは変化という）事象そのものへの着目を意図する点においては他の「コト」の用法と同様である。

### 3.3 形式名詞としてのモノとコトの差異

形式名詞「モノ」と「コト」の意味について例えば広辞苑 [14] では、モノは「当然の意」を含み、コトは「状態等の名詞化」として、デジタル大辞泉 (ibid.) においては両者ともに「体言化」と言及しており、両者の差異の理解を助けてくれるような説明を与えてくれない。そこで、前記の寺村や日本語記述文法研究会 [15] を参考

**Table 2:** Study results regarding usage of Mono and Koto by Mr.Teramura

	モノ	コト
食べる	○	×
忘れた	○	○
する	×	○
書く	○	○
言う	×	○

に、コーパス等を活用した具体的用例の検討から、形式名詞としての「モノ」「コト」の差異を明らかにしたい。寺村 (ibid. p.76) が指摘するように、形式名詞「モノ」「コト」は「名詞としての本来の構文的機能を果たしているときのその『実質的な』意義」に一定の関係を有しているとの想定には一定の根拠があるだろう。したがってこれら形式名詞の用法に関する検討結果を踏まえ、さらに前述した普通名詞の検討結果と照らし合わせた上で、本質的な「モノ」「コト」の概念的差異に関する検討へと進むこととする。

寺村は、「…『モノ／コト』がある・ない」「…は～という『モノ／コト』だ」「…は～『モノ／コト』だ」という3つの構文について様々な例文を比較・検討しているが、「…」や「～」に入る表現のタイプに注目した検討は行っていない。本稿ではこれら3つの構文に焦点を絞り、「モノ」「コト」に接続する前後の表現のタイプに注目することで用法上の差異を明らかにする。

#### 3.3.1 「…『モノ／コト』がある・ない」

寺村は、Table 2 のようにいくつかの事例を用いて適応可能であるか否かを検討している。これらの事例から、「モノ」と「コト」の一方にしか適用が出来ない行為が存在することが理解できる。例えば、寺村は「する」「言う」については「するコトがある」が適用可能である一方、「するモノがある」が適応不可能であり、「食べる」については「食べるモノがある」は適用可能だが「食べるコトがある」は不可能であると指摘する。しかしながら、例えば「食べる」であれば、「時と場合によっては」といったような前提を加えた際に成立する場合もある。そして、寺村はこのような「前提条件文を許可しない」ことを前提に判断を行っていたことが想定される。

寺村の説明には解釈の点において熟慮が必要ではあるが、前提となる条件文を許可せずに例文を考えた場合、同様に「モノ」に適用可能な行為として「置く」「押す」「着る」「砕く」「触る」などを挙げることができ、一方、「コト」については「考える」「決める」「悩む」「知る」

「断る」などを挙げる事ができる。

これらの用例はすべて「モノ」も「コト」も動作の対象を指示していることを示唆しているが、寺村が指摘するように、我々が「言う」または何かを「する」対象は「コト」であって「モノ」ではなく、「食べる」対象は「コト」ではなく「モノ」なのである。すなわち、リンゴや米といった「食べる」行為の対象と、動作や内容といった「する」や「言う」行為の対象は異なるタイプであり、前者は一定の性質を有する具体的個物であり、後者は出来事や事象そのものである。

しかし、Table 2における「忘れた」や「書く」のように、両者とも適用可能な行為動詞の下に現れる「モノ」「コト」の差異は、個物と出来事のの違いでは回収できず、「モノ」の示す一般性への志向と、「コト」が示す個別性への志向への訴えによってのみ理解可能となる。

この事例として「忘れたモノがある」と「忘れたコトがある」を比較する。例えば「母親の顔」は「忘れてしまった『モノ』」であって、「忘れてしまった『コト』」ではない。この事例が示すのは、前者における忘れられた「モノ」とは、必要とされている性質（この場合一定の現象的性質）を有するタイプ [16] としての視覚経験であって、単にトークン (ibid.) としての母親の顔に関する視覚経験ではない。他方、「最後に見た母親の顔」の忘却について触れるとき、我々は「忘れた『コト』」に注目する場合が通常であろう。そのような用例では、数ある母親の顔に関する視覚経験における1つのトークンの忘却を問題にしており、タイプとしての母親の顔を記憶していても、最後に見た母親の顔を忘れてしまったことに焦点がある。類比的な理由から、論文は書く「モノ」であって、書く「コト」ではない。論文はある一定の論旨に沿った議論の表現という性質をもつ「モノ」で（あるべきで）、個別の印刷物ではない。他方、論文の結論部は論文中の具体的な箇所であるから、書く「モノ」ではなく書く「コト」である。

### 3.3.2 「…は～という“モノ／コト”だ」

#### 「…は～“モノ／コト”だ」

「モノ」「コト」に「だ」を接続した「モノだ」「コトだ」という表現は「はずだ」などと同様に、助動詞として用いられる（日本語記述文法研究会, Vol.4 pp.192-193）。「モノだ」「コトだ」はそれぞれ異なる用法が知られており、「モノだ」には (1) 本質・傾向, (2) 当為, (3) 回想, (4) 感心・あきれを表す4つの用法が、「コトだ」も同様に感心・あきれを表す用法と (5) 助言・忠告を表す用法が区別される。Table 3は具体的な例文として、現代日本語書き言葉均衡コーパス「少納言」より抜粋した「～モノ／コトだ」「～というモノ／コトだ」のそれぞれの用例各10件に関し、いずれの用法かを分析したリストである。

**Table 3:** Select examples of Mono and Koto from SHONAGON

番号	例 文	用法
K-01	それは罪のない人を決して傷つけないというコトだ	忠告・助言
K-02	完全犯罪は絶対に成立しないというコトだ	感心・あきれ 忠告・助言
K-03	重要なのは、きちんとミクロを見るというコトだ	忠告・助言
K-04	心の傷は治りにくいというコトだ	忠告・助言
K-05	驚かされるのは、こういう女性を裏切る男が存在するというコトだ	感心・あきれ
K-06	難点は、それを正確に予測できないコトだ	感心・あきれ
K-07	問題はコンペまで持ち込まれてしまったコトだ	感心・あきれ
K-08	それはもう済んでしまったコトだ	忠告・助言
K-09	地獄で仏とは、まさにこのコトだ	感心・あきれ
K-10	負債依存率とは、総資産に占める借入金割合のコトだ	忠告・助言
M-01	社員は個人で申告するのが筋というモノだ	当為
M-02	すべてを望むのは無理というモノだ	当為 本質・傾向
M-03	それは過ぎた心配というモノだ	当為 本質・傾向
M-04	基本は膨らんだ財政を税収の範囲内に納めるというモノだ	当為
M-05	それは「地上最強のワープロ」というモノだ	本質・傾向 感心・あきれ
M-06	そのマイクは当時エルビスが使ったモノだ	回想
M-07	長生きはするモノだ	本質・傾向
M-08	謝罪は日常生活ではおなじみのモノだ	本質・傾向 感心・あきれ
M-09	躰は、何よりも社会が社会のためにするモノだ	本質・傾向
M-10	武士は恩と義理を大切にしたモノだ	回想

日本語記述文法研究会 (ibid.) では、上記 (1) - (5) の用法に関する「モノだ」「コトだ」の差異を説明した上で、「『もの』というのは、時間が経過しても基本的に変化しない物体であり、『こと』というのは、時間の流れの中で生起する出来事である」ため、前者は肯定的に、後者は否定的に使われる傾向があると指摘する。さらにこれらの基本的な「性質」が「モノだ」「コトだ」にも残っており、「『ものだ』は、その前の部分に表された事態が、客観的に存在しているということを表す」ことから (1) - (4) の用法が、「コトだ」においては「行為を実行しないと悪いことがおきるという流れの中で」ある

**Table 4:** Contents instructed by Mono and Koto in the example sentences and the corrected example sentences

番号	原文	用法	入れ替え例文 (コト→モノ/モノ→コト)	用法
K-01	それは罪のない人を決して傷つけないというコトだ	忠告・助言	それは罪のない人を決して傷つけないというモノだ	
K-02	完全犯罪は絶対に成立しないというコトだ	感心・あきれ 忠告・助言	完全犯罪は絶対に成立しないというモノだ	本質・傾向
K-03	重要なのは、きちんとミクロを見るというコトだ	忠告・助言	重要なのは、きちんとミクロを見るというモノだ	
K-04	心の傷は治りにくいというコトだ	忠告・助言	心の傷は治りにくいというモノだ	本質・傾向
K-05	驚かされるのは、こういう女性を裏切る男が存在するというコトだ	感心・あきれ	驚かされるのは、こういう女性を裏切る男が存在するというモノだ	
K-06	難点は、それを正確に予測できないコトだ	感心・あきれ	難点は、それを正確に予測できないモノだ	
K-07	問題はコンペまで持ち込まれてしまったコトだ	感心・あきれ	問題はコンペまで持ち込まれてしまったモノだ	
K-08	それはもう済んでしまったコトだ	忠告・助言	それはもう済んでしまったモノだ	回想
K-09	地獄で仏とは、まさにこのコトだ	感心・あきれ	地獄で仏とは、まさにこのモノだ	
K-10	負債依存率とは、総資産に占める借入金の割合のコトだ	忠告・助言	負債依存率とは、総資産に占める借入金の割合のモノだ	
M-01	社員は個人で申告するのが筋というモノだ	当為	社員は個人で申告するのが筋というコトだ	忠告・助言
M-02	すべてを望むのは無理というモノだ	当為 本質・傾向	すべてを望むのは無理というコトだ	忠告・助言
M-03	それは過ぎた心配というモノだ	本質・傾向	それは過ぎた心配というコトだ	忠告・助言
M-04	基本は膨らんだ財政を税収の範囲内に納めるというモノだ	当為	基本は膨らんだ財政を税収の範囲内に納めるというコトだ	忠告・助言
M-05	それは「地上最強のワープロ」というモノだ	本質・傾向 感心・あきれ	それは「地上最強のワープロ」というコトだ	忠告・助言
M-06	そのマイクは当時エルビスが使ったモノだ	回想	そのマイクは当時エルビスが使ったコトだ	
M-07	長生きはするモノだ	本質・傾向	長生きはするコトだ	
M-08	謝罪は日常生活でおなじみのモノだ	本質・傾向 感心・あきれ	謝罪は日常生活でおなじみのコトだ	忠告・助言
M-09	贖は、何よりも社会が社会のためにするモノだ	当為 本質・傾向	贖は、何よりも社会が社会のためにするコトだ	忠告・助言
M-10	武士は恩と義理を大切にしたモノだ	回想	武士は恩と義理を大切にしたコトだ	

出来事の生起を促すという忠告の用法が、それぞれ説明されるとしている。

これらの説明の正確さとその根拠は別として、「モノ」「コト」の概念的な特徴が「モノだ」「コトだ」に反映されているという点については同意できる。とりわけ「モノだ」における「モノ」が本質・傾向を表すという用法は、これまでの我々の分析と完全に一致する。また、当為は“一定の性質を実現すべき”という主張として理解できるだろう。回想については、上で論じたように、「モノ」として思い出される内容は、例えば M-06「エルビスが当時使ったという性質」や、M-10「武士は恩

と義理を大切にしたという一般的な事実」のように、他と区別するための一般的性質を指し示しており、個別の出来事を指し示しているわけではない。

一方、「モノだ」「コトだ」に共通する感心・あきれの用法であるが、これら内容を比較すると「モノ」と「コト」に関する一般性（モノ）と個別性（コト）という志向の違いを見出すことができる。Table 4 は Table 3 の例文について「コト」「モノ」の置換可能性を確認した表である。このうち、感心・あきれの用法において K-05, K-06, K-07, K-09 は「コト」を「モノ」に置換することが不可能である。それぞれの例文は個別の事例に関わ



Table 5: Conceptual difference of Mono and Koto

	モノ	コト
着目点	事物の一般的性質	出来事の一回性
指定する対象	タイプ	トークン

る難点（「それを予測する」）や問題（「コンペまで持ち込まれてしまった」）、ある特定の人物の存在（「こういう女性を裏切る男」）や特定の状況（「まさにこの」）についての感心やあきれを表現している。K-10も特定の用語に関する説明であり、特定という点において前述と同様といえる。

「コト」「モノ」の置換が可能な事例でも表現の意図の変化を確認できる。K-02については「コト」を「モノ」に置換し、「完全犯罪は絶対に成立しないというモノだ」とすると、元々の感心・あきれおよび忠告・助言から、本質・傾向の表現へと意図が変化している。これはK-04についても同様であり、K-08については忠告・助言の意図は消えて、回想の表現が強まる様に思われる。他方、K-01、K-03のように忠告・助言でありながら置換できない例文についてであるが、いずれも特定の行動規範（「彼の信条」）や行為（「そのデータの解析」）に関する忠告や助言を表現している点を鑑みれば、関心・あきれの用法における置換不可能な例文と構造は同じであろう。

「モノ」から「コト」への変換可能な事例M-01、M-02、M-03、M-04、M-05、M-08、M-09はすべて忠告・助言に意図が変化している。これはすべて「モノ」表現が持つ一般的な性質とそれに関わる当為が、個別の事例に適応された場合には助言や忠告として理解されるということであろう。

以上から、本用法においては言葉が指し示す意図の変更はあるものの、特定の個別事例へと変更が可能な場合は「コト」へと変換が可能であり、一方、一般的な性質へと変更が可能な場合は「モノ」へと変換できるということが分かる。

### 3.4 本質的なモノとコトの概念的差異

上記の考察を踏まえると、「モノ」と「コト」の概念的差異は主として指示対象と着目点に関する志向の違いに集約することが出来よう。すなわち、「モノ」は事物のタイプを指示することによって、そこに内在する一般的な特徴へ着目するのに対し、「コト」は個別的な出来事や行為を指示し、その個別性に着目点が置かれている（Table 5）。

このように、「モノ」と「コト」の概念的な差異は、同

一の指示対象への異なる光の当て方に存する。両者の表現を含む以下の例文を考えてみよう。「この測量方法は当時、伊能忠敬が採用したモノだ。そして、この測量方法の価値は伊能忠敬が採用したコトにある。」これら二つの文における「モノ」と「コト」は両者とも「伊能忠敬の採用した測量方法への着目」を促すが、「モノ」の場合は、その測量方法が「伊能忠敬が採用した方法である」という性質への着目を促すのに対し、「コト」においては、「伊能忠敬がその測量方法を採用したという一回性の出来事に対する強調」を旨としている。つまり、モノは事物・事象・現象・出来事に内在するタイプを指示し、コトはトークンを指示しているといえる。この違いが「モノ」と「コト」の本質的な差異なのである。

## 4. 「モノづくり」「コトづくり」の再定義

前章までの結果をもとに、「コトづくり」および「モノづくり」の再定義を行う。両者とも接尾語として「づくり」がつく。「づくり」については、デジタル大辞泉[17]によると、(1) 名詞の下に付いて、そのものを念を入れて作り上げる意、(2) 名詞の下に付いて、そのものを使って作る意、(3) 名詞や形容詞・形容動詞の語幹の下に付いて、そのものらしい体裁、また、そのような感じに作ってある意、とあり、この場合においては(1)の用法が妥当といえよう。すなわち、モノづくりは「モノを新たに作り上げる」、コトづくりは「コトを新たに作り上げる」意となる。

さて、本稿の中心課題はもちろん「コトづくり」という表現の分析である。このとき「モノ」を「物理的な存在を指示する」と限定し、「コト」をモノづくりの対比表現として、物体として指し示し得ない「知識」や「行為」にのみ焦点をあてることを意図したならば、概念的混乱は不可避であろう。なぜなら、前章で述べたように、「モノづくり」の対象に、生産や製造など物体と見なすことが出来ない事象も含むのは、「モノ」の一部の用法（e.g. 「モノを知らない」「謝罪は日常生活ではおなじみのモノだ」）を考えればむしろ当然で、日常の用法から逸脱する訳ではないからである。結果、物理的存在と対比された『コトづくり』は、誤った概念的理解のゆえに、二つの作為の概念的な差異を曖昧な形で残す。

すなわち、「モノづくり」と「コトづくり」はそれぞれ「つくられた対象の種類」において異なるのではなく、事例のどの側面に着目するのかという強調点において異なるのである。「モノづくり」はつくられた対象の有する一般的な性質を強調するため、結果として我々は物理的な存在のあり方や性質に注目する。他方で、「コトづくり」は個別的な事態を作り上げること、つまり事態の生起や時間的な変化への着目を促す。もちろん、個々の

実例には常に両方の要素が共存するため、同一の事物・事象・現象・出来事であっても着目する観点によって、それを「モノづくり」「コトづくり」のどちらとしても捉えることは、ほとんどの場合において可能である。

我々の考察が正しく、「モノづくり」「コトづくり」の差異が上述のような対象への光の当て方の差異に存するのであるとすれば、「モノづくり」と「コトづくり」は「つくる対象」によって区分けすることはできない。むしろそれは、「つくっている／つくられた対象」を「(何らかの) 性質を生み出したか」または「(何らかの) 出来事を生み出したか」という、「どちらの側面を強調／解釈するか」によってのみ区分が可能となる。

注意すべき論点は、このような区分は個々の「モノづくり」も「コトづくり」においても、それぞれの試みを「顧みる」際の観点としてより有用であるという点であろう。すなわち、設計論の観点から言えば、「どちらの側面に着目してフィードバックを行うか」によって初めて違いが明確に現れるのであって、どちらかの側面のみに着目して計画・立案を行うのはあまり現実的ではない。

例えば、ソニー株式会社が発売したウォークマンを例にした場合、「携帯型の音楽再生機器」という性質を生み出すための「モノづくり」であり、同時に「皆が移動しながら音楽を聞く」という事態を生み出すための「コトづくり」であったといえる。当然、これらは同一事象であり、コトづくりの箇所を目的、モノづくりの箇所を手段と考えれば、開発時においても両方の観点は同時に着目され、顧みながら進行したと考えるのが自然であろう。

同様に、トヨタ自動車株式会社によって開発されたカンバン方式であれば、「カンバンを使用したジャスト・イン・タイムの生産方式」というモノづくりが、「仕掛在庫の最小化」という出来事を生起するという点において、コトづくりとして記述することができるのである。そして先の事例と同じく、これらは手段と目的のような関係性として考えることも可能であるため、両者は同時進行であったと考えるのが自然である。

以上の論点を踏まえ、実際の開発現場において、設計論の観点からこれらの区分を性格づけるのであれば、「コト」が生起を意図されている出来事・現象、つまり目的であり、「モノ」はその現象を生起させるための手段という関係を見出すことができるだろう。そして、「モノづくり」と「コトづくり」は、それぞれ「出来事・現象づくり」と「(そのための) 手段づくり」という目的と手段の関係性で整理するのが妥当である。両者は当然のことながら同時進行かつ同時発生している。ゆえにほとんどの「モノづくり」は「コトづくり」であり、またその逆も真である。しかしこのことは「モノづくり」と「コトづくり」が概念的に曖昧であることを意味しないのはすでに明らかにしたとおりである。Table 6 は今までの議

Table 6: Redefinition of Koto-tsukuri and Mono-tsukuri

大前提		
「モノづくり」と「コトづくり」はそれぞれ「つくられた対象の種類」において異なるのではなく、事例のどの側面に着目し、省みるのかという強調点において異なる。すなわち、事例そのものを区分することはできず、「どちらの側面を強調／解釈するか」によってのみ区分が可能となる。		

	モノづくり	コトづくり
着目点	事物に内在する一般的性質	事態の生起や時間的な変化
着目する対象	タイプ	トークン
解釈する観点	それにより、いかなる性質が生み出されたか	それにより、いかなる出来事が生み出されたか
再定義	新たな出来事や現象を起こすための手段を生み出していくこと	様々な手段を用いて新たな出来事や現象を生み出していくこと
別の言い方	手段づくり	現象づくり

論をまとめた再定義である。

## 5. 「モノづくり」「コトづくり」の関係性

これまでの議論により、「モノづくり」と「コトづくり」は事象・現象・出来事によっては不可分であり、両者ともに同時発生的であることがわかった。つまり、「モノづくり」と「コトづくり」は事象・現象・出来事において対立項目として比較すべき対象ではなく、なにかしら新たな事象や物事を生み出す際に「同時的に勘案すべき2つの観点・視点」として考えるのが妥当であろう。当初よりその意図を持っていたか否かは定かでないが、コトづくりの説明においても『「ものづくり」に代わる』という表記[8]が示されているように、対立項目としての意味合いが強調された結果、対立項のようなイメージがついた可能性は否めない。

導入時の意図や表現はさておき、これまでの分析と再定義を踏まえると、「コトづくり」という概念は、それまでの「モノづくり」という言葉では補いきれなかった「モノづくりに対して相互補完的に必要な『現象そのものへの着眼』」という新たな概念の発見・提唱と考えると、その意味合いはより深まり、かつ発展的な解釈となり得るのではないだろうか。

つまり、これからの社会において、「モノづくり」も「コトづくり」も当然に必要な重要であり、両者は「新



たな事象や物事を生み出す際に同時に勘案すべき観点」と位置づけるのが妥当というのが本論の結論として浮かび上がるのである。ただし、前述の通り、試みを顧みる観点としては明確に区分が可能であるため、例えば「優秀なモノ／コトづくりを選定する」といった場合に、これを「モノづくり」と「コトづくり」に二分して評価することに何ら違和感はなく、むしろ同一事象において「モノづくり」としては高評価であっても「コトづくり」としては高く評価出来ないという現象が生じることによって、その事象における今後の方策に関する手がかりはより掴みやすくなるのではないだろうか。

## 6. まとめ

本稿ではモノとコトの概念的差異からモノづくりとコトづくりの再定義を試みた。その結果、モノとコトの概念的差異はタイプとトークンにあり、モノづくりとコトづくりは事象を解釈する観点として区分けが可能であり、これを設計論として考えた場合、両者は同時発生的かつ相互補完的であり、同時に勘案すべき観点であることがわかった。

一方で課題もいくつか残っている。ひとつは、英語表現の問題である。「コトづくり」「モノづくり」は日本語を発祥とする概念であり、英語に直した場合、どのような言葉でこれを説明・区分するのが相応しいかについては未検討である。ひとつの手がかりとしてはタイプとトークンという概念を用いてこれを説明する方法が考えられるが、これについては慎重に検討が必要であろう。次に記号化の問題である。今回、研究の過程において数式や図表など、様々な記号化を試みたが、最終的に説明可能な記号作成には至らなかった。概念の理解促進において記号化は重要な役割を果たすといえ、記号化への試みは急務であるといえる。今後はこれについても検討を行う予定である。

**謝辞:** 本研究を行うにあたり数学的観点から多大なるご助言をいただきました芝浦工業大学教授の山澤浩司先生、コトづくりに関する様々なご助言をいただきました横幹連合の関係者の方々に篤く御礼申し上げます。

## 参考文献

- [1] 鈴木久敏,「コトづくり」の系譜と認定事業, 横幹, Vol.10, No.2, pp.71-75, 2016
- [2] 田中央, 商品企画のシナリオ発想術: モノ・コトづくりをデザインする, 岩波アクティブ新書, pp.1-18, 2003

- [3] 常盤文克, コトづくりのちから, 日経 BP 社, pp.37-42, 2006
- [4] 藤堂安人,「ものづくり」と「コトづくり」の両立を考える, 日経 XTECH Tech-On!, <http://techon.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20070423/131496/>, 2007 (2019年6月1日参照)
- [5] 横幹連合ホームページ, コトづくり長野宣言, <https://www.trafst.jp/archive/200511appeal.pdf>, 2005 (2019年6月1日参照)
- [6] ものづくり基盤技術振興基本法, [https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws\\_search/lsg0500/detail?lawId=411AC1000000002&openerCode=1](https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=411AC1000000002&openerCode=1), 1999年制定
- [7] 日本学術会議機械工学委員会生産科学分科会, 21世紀ものづくり科学のあり方について, 日本学術会議, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-h64-2.pdf>, 2008 (2019年6月1日参照)
- [8] 横幹<知の統合>シリーズ編集委員会, <知の統合>は何を解決するのか モノとコトのダイナミズム, 東京電機大学出版局, pp.19-20, 2016
- [9] 寺村秀夫, 寺村秀夫論文集(1), くろしお出版, p.75, 1993
- [10] 廣松 渉, もの・こと・ことば, 筑摩書房, 2007
- [11] 長谷川三千子, 日本語の哲学へ, 筑摩書房, 2010
- [12] 「もの(物)」「こと(事)」, デジタル大辞泉, 小学館, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/> (2018年8月28日参照)
- [13] G・W・F・ヘーゲル著, 長谷川宏翻訳, 哲学史講義 II, 河出書房新社, 2016
- [14] 新村出編, 広辞苑 第六版, 岩波書店, 2011
- [15] 日本語記述文法研究会編, 現代日本語文法(4) 第8部・モダリティ, くろしお出版, 2003
- [16] Linda Wetzel, Stanford Encyclopedia of Philosophy, Types and Tokens, Center for the Study of Language and Information (CSLI), Stanford University, 2006, <https://plato.stanford.edu/entries/types-tokens/> (2018年12月21日参照)
- [17] 「つくり(作り/造り)」, デジタル大辞泉, 小学館, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/> (2018年10月2日参照)

### 蘆澤 雄亮



2008年千葉大学大学院自然科学研究科人間環境デザイン科学専攻博士後期課程修了。同年より公益財団法人日本デザイン振興会、2017年より芝浦工業大学デザイン工学部助教、現在に至る。デザインマネジメント理論、デザインプロモーション理論などの研究に従事。工学博士。日本デザイン学会などの会員。

### 櫻木 新



2007年 University of Florida, Department of Philosophy, PhD(Philosophy) 修了。2013年より芝浦工業大学デザイン工学部准教授。専門は分析哲学、特に認識論、心の哲学。主要な研究テーマは記憶と記憶表現。近著に“On Different Concepts of Experiential Memory”, *The Journal of Philosophical Ideas 2017 Special Issue*.